

Beach House For All Seasons

終わりになき夏のビーチハウス

21世紀の湘南に生まれた、サーファーによるサーファーのための空間、
“surfers(サーファーズ)”という名前のビーチハウス。

文：森下茂男

終わりになき夏のビーチハウスの宵の宴。太陽が生まれたハーフマイルビーチと謳われる
逗子海岸と葉山マリーナなど、相模湾を一望する夜景も美しい

GOU NAKAMURA

日本で初めての海水浴場は1885年(明治18年)に初代陸軍軍医総監松本順により大磯に開設されたと資料にある。しかし、この当時の海水浴というのは泳いだり日光浴をするということではなく、病気治療目的のための医療行為としておこなわれていたようだ。大磯海岸をはじめいくつかの海水浴場を開設した松本順は、オランダの医師ポンペに学んでいる。当時、西洋では支柱を立ててそれにつかまり、身体を海水に浸すことで病気を治療する医療行為が広くおこなわれていた。さらに調べていくと、大磯海水浴場よりも前に横浜市金沢区にあった富岡海水浴場(宮の前海水浴場)では、横浜にあった外国人居留地で暮らしていた外国人たちが蒸し暑い日本の夏を快適に過ごすために海水浴を楽しんでいたようだ。

1887年には東海道鉄道(現JR東日本)が横浜より先の国府津まで延長されたことにより、湘南海岸は海水浴場として発展していく。逗子海岸もまた1887年、軍医の石黒忠直によって海水浴場として開設され、1900年にはよしづ囲いの海の家が海岸沿いにできはじめた。その後、海水浴が一般的になったころの海の家では、水着に着替えるための更衣所や、海から上がったときの



(上) 1930年代の逗子海岸。左端に逗子水族館が見える。当時の絵はがきより
(下) 昭和26年ごろの葉山森戸海岸。右端が佐久間浩の父親が営業していたラッキーランド。
彼によると、カタカナの海の家はここだけだったという。ヒゲタ醤油の宣伝カーがレトロ感を醸
しだしている

SAKUMA COLLECTION

シャワー、そして休憩所、また飲食を提供する食堂をも兼ねるようになった。

1902年には江ノ島電気鉄道が藤沢―片瀬間の営業を開始するなど鉄道網の整備がすすみ、これによってそれまで海には縁がなかった地域の人たちにも手軽にいける夏のレジャーとして海水浴場は発展していき、それとともに海の家もまたボートや浮輪などの海水用品のレンタル、そしてピンボールや射的などの遊技場としての海の家ができるなど、海水浴場はレジャーランド化し、日本のビーチカルチャーのひとつともいえる海の家はバリエティ豊かに進化していく。

ラジオパーソナリティのジョージ・カックルは海を家の思い出を次のように語る。「高校生のころまでシーキャッスルの裏に住んでいたので、夏になるとよく歩いて鎌倉・由比ヶ浜にある海の家に行っていた。いまは、海岸に一列に海の家が並んでいるけど、その当時は海の家が2列で並んでいて、海の家と海を家のあいだが道になっていて通れるようになっていたんだ。いまの江ノ島の参道のように両側に店が並んでいるって感じで、弓を射るところがあったり、射的があったり、スマートボールがあったり、風船すくいや金魚すくいなどが並んでいた。射的なんか、景品が落ちないから、友達が店番のおばちゃんと話している際に、銃身で景品を落としたという楽しい思い出がある。そういえば、クロンボ大会っていうのがあって、うちのお手伝いさんが出ていた。当時はとにかく、海の家は子供が遊べる場所だったんだ。それから1990年代後半に日本に戻ってきたら、鎌倉の海の家は全部カフェバーになっていた。あれじゃ、子供たちは遊べないよね」

葉山ローカルで、のちにサーファーズのコンセプト作りにも参画する沼田光博は、葉山一色海岸の思い出を次のように話す。「高校生のころは、葉山の一式海岸にロッカーズという海の家があって、夏になるときれいなお姉さんたちがバスに乗って東京からやってきていた。海の家をやっていたのは髪をリーゼントにしたお兄さんたちで、みんなかつてよかったね。名前が横須賀にあったロッカークラブからきたのかはわからないけど、ドブ板通りにあったロッカークラブは横須賀の海軍の兵隊さんがベトナムに行く際に洗濯物などを預けていたところで、戦死したりしてピックアップにこないTシャツやジーパン、洋服類を中古衣料として売っていたところ。葉山にはほかにモピーズという海の家があって、そこではライブがあったりした。暖くなる5月ぐらいから一式海岸は週末になると兵隊さんやその家族、友人たちがキャンプしながらサーフィンしたりしてビーチで遊んでいた」

同じく葉山ローカルの故佐久間洋之介の父、佐久間浩によると、彼の父親、佐久間沖之介は終戦直後の1950年(昭和25年)ごろより葉山森戸海岸でラッキーランドという海の家をやっていた。「昭和26年から3年ほど乙姫まつりというカーニバルがあっ

特の海文化が形成されていた」と言う。

日本独特の海の文化、海の家もまた時代の流れのなかで海水浴客のニーズによって変貌・進化していく。昭和から平成へ、海の家は家族連れがくつろぐスタイルから、若者たちが音楽を聴きお酒が楽しめるカフェバー・スタイルへと変化していく。こうした流れのなか、2009年にサーファーズという、サーファーたちの手による海の家が逗子海岸に登場する。それはサーファーの持つビーチカルチャーと日本独自の海文化が融合したものなのだろう。サーファーズが誕生する際にマスターピースとなったライブハウスがある。それが1999年に金沢文庫の国道16号線沿いにオープンしたザ・ロード&ザ・スカイ(以下ロースカ)というお店だ。

オーナーの成瀬一郎は1963年、金沢文庫で生まれ育つ。アメリカンダイナーとしてスタートしたロースカは、成瀬一郎が1977年、中学2年生の夏休みにボーイスカウトの一員としてアメリカを巡ったときに培われていた。「ボーイスカウトの団長さんが、ナショナル・アメリカ・ジャンボリーというイベントでアメリカを回るので、そのツアーに参加した。ロサンゼルス、デンバー、ニューヨーク、バッファロー、シカゴ、サンフランシスコとまわったんだ。そのときのロサンゼルス、サンセットストリップ、ヤシの木、海、マリブ…やばかったですよ。アメリカかぶれはそこからです」と話す。

そして、アメリカの音楽に傾倒していく。「ラジオをかければ、ホテル・カリフォルニアがヘビーローテンションでしょ、やばかったな。音楽は中学からロック。イーグルスから入って、ジャクソン・ブラウン、ドゥービー・ブラザーズ。それからサーフィンをはじめてさらにリンクしちゃって、21歳(1983年)のときにお金を貯めて3ヶ月ぐらいロサンゼルスに行った。ベンチュラからラグナまでのあいだでクルーズしていた。ロングビーチでピザ屋のバイトをしたりした」

帰国後、成瀬はアルバイトをはじめますが、それがロースカを立ち上げるヒントとなったお店だ。「帰国後、プラブラしていたけど、“サムズアップ(横浜のライブハウス)”の佐布さんの“バディ”というお店でキッチンをはじめた。でも料理を出すと手が空くから、2台あったターンテーブルでレコードをかけたり曲をつないだりしてDJみたいなこともやっていた。ライブもあったし、今のベースの部分勉強させてもらった。で1年ほどいて、親父が総菜の卸しをやっていて、呼び戻される感じで、パン屋とレストランが合わさったようなお店の手伝いをはじめた」

金沢文庫のダイエーの地下ではじめたこの“パンフ”というパン屋さんとカフェに出入りしていたのが、ロースカの創業当時のメンバーとなる北川正毅、通称“キモ”と、今、イラストレーターとして大活躍している花井祐介である。「ばくはダイエーの目の前のマンションに住んでいて、成瀬さんのカフェで友達がバイトして



NORMOTO CHIKAWA

いたので、そこに毎日のように入り浸っていました。初めてサーフィンに連れていってくれたのも成瀬さんでした」と、花井は成瀬との出会いを語る。

ロースカを開店させた成瀬の強力な助っ人となったのがキモだ。「ばくの友達が成瀬さんのやっていたダイエーの地下のパン屋で働いていたので、成瀬さんを知っていたのですが、ロースカを手伝うのは後のことです」と語る。キモはサラリーマンを辞めたあと、'96年、'97年にフラを習いにハワイに行っていた。「デビッド・リンドレーがライ・クーダーといっしょにやっているところに、ハワイ系の音楽が気になりはじめて、“ストーブス(サムズアップと同じ系列のライブハウス)”にマカハ・サンズといっしょにチンキー・マホエがきていたんです。それを見たときにかっこいいなって思い、踊っている男の子に声をかけて、フラをやろうと思った」

こうしてキモは、フラを習いにハワイへむかう。「チンキーの家に居候しながら、フラを習いました。'97年のメリーモナークに出場し、チームで優勝しました」。キモがカイルアにあるチンキー・マホエの家に居候しているときにいきなり成瀬さんがそこに泊まりにきたんです。チンキーに言われましたよ。“何でビジネスで来ているのに、ホテルを取ってないんだ”って。たばこやお酒の匂いをぶんぶんさせているし、ひんしゆくでしたね。でも成瀬さんはチンキーにアロハシャツのお店などを紹介してもらっていましたよ」

キモはハワイから帰国後、建築業のアルバイトをはじめます。このころ、成瀬はダイエーのお店を営業不振により閉めることになる。「お店を6年やったけど、朝から晩まで働きづめなのにもうからないし、借金は増えるし、テナントの契約更新を機会にその店を閉めた。親父がやっていた総菜屋の土地が空いていて16号線に面しているし、店ができるなと考えた。それで、祐介と祐介の友達、キモの4人で6ヶ月かけて店造った」



RIRYO



NORIMOTO CHIKAWA



RIRYO

(上) 岬の沖で、カジュアルな波を楽しむスタッフの岸壁ー
(中) 2012年8月、逗子海岸時代の海の家"surfers"
(下) 2014年初夏、サーファーたちの手で新生サーファーズの建築はじまる

荒井は帰国してから1年ほどそのペルー人のお店を手伝いながら独立に向けて市場調査をつづけ、ついに新橋でペルー料理店“荒井商店”をスタートさせる。その“荒井商店”は、今年、ミシュランが発行する『ビブグルマン』というグルメ・ガイドブックでペルー料理のカテゴリーで紹介され、荒井はその分野で注目を浴びる新進気鋭のシェフと評価されている。

2011年、一定の顧客と評判を得ていたロースカに新たな飛躍のときが訪れる。サーファーズをプロデュースした沼田は言う。「逗子で歯科医を開業している波乗り仲間の田中俊樹が“逗子海岸で海を家の権利がもらえる”って連絡してきた」。田中は以前、沼田、横山泰介、岸俊一、大野貴幸たちと、みんながくつろげる場所をつくろうと“サーファーズ・アートギャラリー”という名前のサーファーズ・バーを逗子のビルの一室で不定期にやっていたのだが、海の家で同じようなことができないかと沼田に相談してきたのだ。

前々からサーファーによるサーファーのためのお店をやりたいと考えていた沼田はロースカの成瀬に話を持ちかけ、サーファーズ・アートギャラリーとのコラボで海の家をスタートさせることになる。海を家のネーミングは相談の結果、以前横山が出版した写真集のタイトルを取って“surfers”に決定する。こうして逗子海岸“surfers”(以下サーファーズ)が誕生したのだ。

「23〜24歳のころ、タイやインドを旅しているときに、ビーチ沿いにかっこいい海の家があって、最初にサーファーズを建てたときは、インドのゴアにあった海の家をイメージして、屋根のない海の家にした」と沼田は言う。

しかし最初の年は、場所が悪かったせいもあって業績は散々だった。成瀬は言う。「1年目は金銭的にやばかったですね。場所もよくなかったし、お客さんもすくなかった。2年目もやろうかなって思ったときに、うちの奥さんから“アタマ、おかしいの？相当アタマ悪いのね”って言われた。でも2年目からはすごくいい場所で、それはすごくラッキーだった」

海の家サーファーズには海で遊ぶことに長けたサーファーたちのアイデアが詰まっていた。SUPはもちろんのことカヌーや、海を家の壁面を利用したボルダリング、そして砂浜に張ったスラックラインなど、ファミリーで遊べるアクティビティも用意されていた。成瀬は「お客さんの評判はよかったですね。子供が安心して遊ばせられる、ファミリーチックな空気感があった」と言う。

しかし、夜遅くまで大音量で鳴らすライブ演奏や治安の悪化など、サーファーズにとっての逆風が吹きはじめる。2014年に逗子市は「日本一厳しい条例」を施行した。それによると、海を家の営業時間は午後6時半までとし、海水浴場での飲酒やライブ音楽、海の家以外でのバーベキュー、入れ墨露出禁止など、いわゆる海を家のクラブ化を規制することになった。サーファーズの関係者は「サーファーズがスケープゴートにされた」

と、逗子海岸でのサーファーズの存続が危ぶまれる事態となる。じっさい、2014年の逗子海岸の海水浴客は前年の2013年より80パーセントも減少し、売上が90パーセントも落ちた海の家もあったほどだ。

ライブが売りの海の家サーファーズの存続に赤信号がともる。「5年やって、6年目に逗子市の条例が変わって、音を出せなくなり、ライブができなくなった。それでぼくはサーファーズを止めるつもりでいた」と成瀬は言う。しかし、前出の逗子駅前で不動産業を営む佐久間は新生サーファーズに最適な物件を用意していた。

大崎と波子不動のポイントを一望する国道134号線の海側の高台にはこじんまりとした2階建ての新築の洋館が建っていた。佐久間の不動産仲間が扱う物件で、売りに出されていたのだが、買い主が見つかるまでの条件で成瀬が借りることになる。「沼田さんが“大崎の崖の上に物件あるけど、借りない”って言ってきた。で、佐久間不動産で家賃を訊いたら、ええっという金額なわけ。でも自分はやりたくて仕方ないわけですよ」と成瀬は言う。

こうして、新たなサーファーズがスタートするのは2014年の夏のことである。「新しいサーファーズのデザインは基本的に沼田さんがアイデアを出したんだけど、ふたりで考えながら、ああしようこうしよう相談して決めた。まだまだ理想には遠いですね」と成瀬は言うが、新サーファーズの建築には多くのサーファーたちが関わっていた。沼田は「ほんとうはカリフォルニアの崖の上に建っているこじんまりとしたおしゃれな店をイメージ

していた」と言う。

建ぺい率が一杯で、新たに屋根はつくれなかったので、ライブ演奏のためのステージや客席のスペース、そしてバーカウンターはテンポラリーに着脱できるように複数のヨットのセイルで空のスペースを埋めている。建物の1階は厨房とカウンターがしつらえられ、2階はサーフショップと着替えができるクラブハウスになっている。海へ降りる出入り口のわきにはシャワーが完備され、サーフボードラックやウェットスーツが干せる物干し台などが設置され、サーファーにとっては理想的な環境が整えられつつある。

しかしこの敷地はいわく付きの物件で、逗子市の道路や神奈川県海岸区域など、権利が複雑に入り組んでいて、建てられない場所があったりして、大変な苦労を強いられたようだ。たとえば、敷地内全面に張られたウッドデッキの一部が、市道にかかっていることがわかり、市の指導で取り壊されたのだ。

2016年3月現在、サーファーズはいまだ進化中だ。いかに楽しく快適に集えるか、みんなでアイデアをだしあっている。オープンスペースのウッドデッキには大きなソファがつい最近できた。また、崖の中腹にはウッドデッキの休憩所をつくった。その下のスペースには現在薪のお風呂ができつつある。数年前、ここを初めて訪れた真木蔵人は大崎のポイントを眺めながら、こんなことを言っていた「先輩方、いい場所にいいものをつくりましたね」と。■



NORIMOTO CHIKAWA

今年3月末、サーファーズの外壁にコロナビールの壁画が花井祐介の手で描かれた。これはコロナビールの世界展開のプロモーションの一環で、日本では壁画のアーティストとして花井祐介がピックアップされた